龍王山古墳群出土手焙形土器の線刻文様

杉　山　拓　己

目　次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
Ⅱ．龍王山古墳群の古墳時代初頭の遺物　・・・・・・・・・75
Ⅲ．線刻文様をもつ手焙形土器・・・・・・・・・・・・・・75
Ⅳ．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

要　旨

天理市龍王山古墳群の調査では、古墳時代初頭の遺物が複数の地点で出土しており、当該期の集落の存在を示す。今回はこの中の線刻文様をもつ手焙形土器片を紹介する。文様はバチ形図形と複合鋸歯文を組み合わせた組帯文系文様で、桜井市谷遺跡出土例も類似した構成をもつ。この２例により、庄内式併行期の奈良盆地における組帯文系土器文様の様相の一部を提示できた。

杉山　拓己（すぎやま　たくみ）
奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員

Ⅰ．はじめに

筆者は以前、桜井市纒向遺跡出土の土器片にみられる線刻文様について検討し、バチ形図形から構成された組帯文（弧帯文）系文様として評価した。[1)]

今回は、当研究所が所蔵する天理市龍王山古墳群の出土土器の中にバチ形図形を有する線刻文様を確認したので、県内の類例とともに紹介したい。

Ⅱ．龍王山古墳群の古墳時代初頭の遺物

龍王山古墳群は、龍王山の西南麓を西流する西門川に沿って6世紀から7世紀にかけて600基を超える古墳が展開した大型群集墳である（図1）。1984・85年に砂防ダム建設に伴って古墳群の一部が発掘調査の対象となり、1993年に報告書が刊行された。[2)]

この時の発掘調査では、2つの地区で古墳時代初頭前後の土器が出土している。西門川と、南東から合流する渋谷川に挟まれたB地区では、開墾による撹乱土の中から縄文時代の土器や石鏃とともに当該期の土器が採集されている。時期は纒向4類[3)]を中心とする。西門川の対岸に位置するE地区では、E-13号墳で盛土の下に包含層が確認された。その一部を調査したところ、土器片がまとまって出土した。時期は纒向4類から5類である。また、E-13号墳の東側の石垣遺構周辺からも出土している。

報告書ではこれらの土器について、詳細は不明ながら当該期の集落の存在がうかがえるとした。[4)]また、東海地方の土器がまとまって認められることにも言及し、[5)]大和の他の遺跡と同じ様相と評価している。

龍王山古墳群から西門川を下り盆地に出ると、右岸の段丘上に行燈山古墳を盟主とする柳本古墳群の支群がある。また、周辺には古墳時代初頭頃の複数の集落遺跡が近接して存在する。これらは南方の纒向遺跡と共通する要素をもつことから、柳本遺跡群として一括する見解がある。[6)]龍王山古墳群の土器出土地点は、これら柳本遺跡群や纒向遺跡と密接な関わりをもつものと考えられる。

Ⅲ．線刻文様をもつ手焙形土器

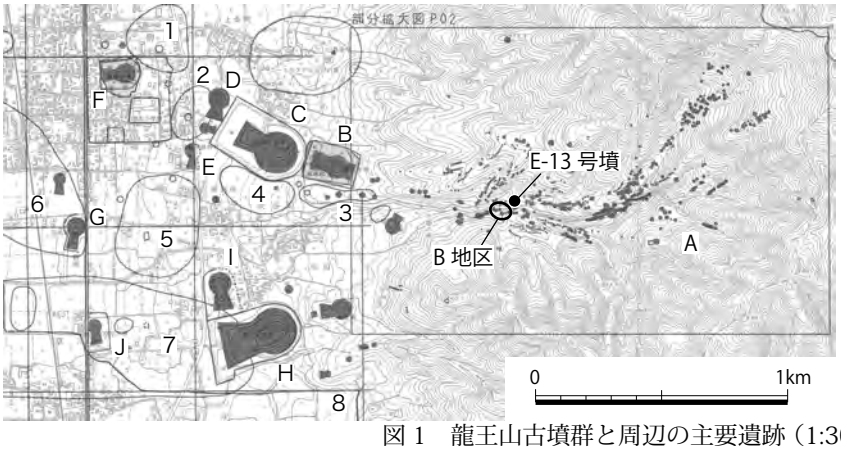
今回紹介するのはこの報告資料のうち、B地区採集の手焙形土器の破片である。報告書では拓本と断面図が掲載されているが、[7)]とくに説明はなく、手焙形土器であることや文様があることも明示されていない。そこで今回新たに実測図を作成した（図2-1）。

小片であるが手焙形土器の覆部の開口部である。正確な傾きは不明だが、文様中の平行する2条の直線がおおむね水平になるようにして図化した。厚さは10mm前後で、通有の手焙形土器よりも重厚な感がある。時期は纒向4類頃と考えられる。

開口部の作りは外側のみを肥厚させ、端部は面をもち、そこに板ナデ調整を施す。内面はナデ調整で、接合痕1条が明瞭に残る。

外面にはナデ調整の後に線刻文様を施す。やや鋭利なヘラを使用し、線幅は0.8mm前後である。残存範囲は横走する2条の直線で上下に分割される。下段は複合鋸歯文で、その内部には交互に向きを変えて斜線が充填される。上段には上側の直線に接してバチ形図形が上向きに描かれる。バチ形図形の内部は中心線に加えて、その両側に弧線1条ずつを配する。

これと類似する文様構成をもつ事例が、桜井市谷遺跡の第8次調査で溝SD02から出土した手焙形土器の破片である（図2-2）。[8)]同じ遺構から出土した土器は纒向3類頃から



〔主要古墳・古墳群〕
A 龍王山古墳群
B 櫛山古墳
C 行燈山古墳
D アンド山古墳
E 天神山古墳
F 黒塚古墳
G 石名塚古墳
H 渋谷向山古墳
I 上の山古墳
J 柳本大塚古墳

〔主要集落遺跡〕
1 黒塚東遺跡
2 アンド山遺跡
3 薬師山遺跡
4 山田遺跡
5 立花遺跡
6 柳本遺跡
7 向山遺跡
8 纒向遺跡

図1　龍王山古墳群と周辺の主要遺跡（1:30,000）

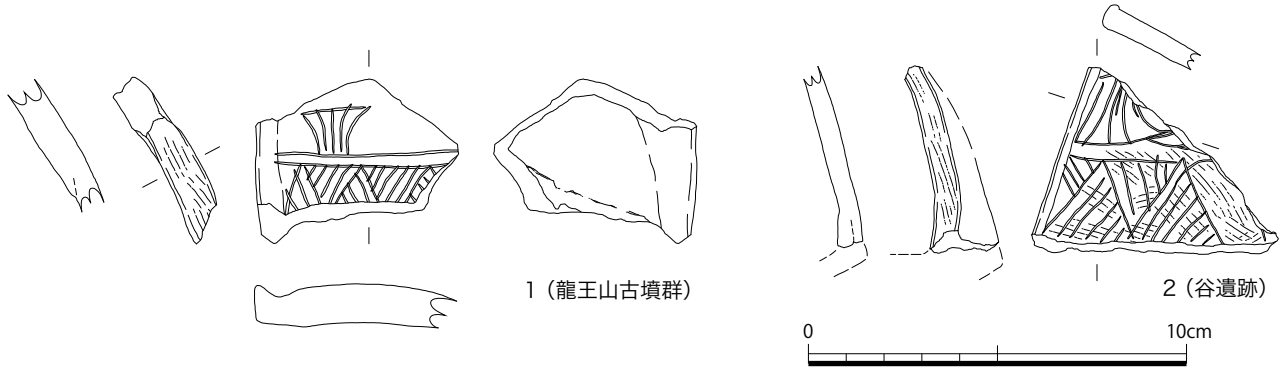


図２　バチ形図形を有する線刻文様をもつ手焙形土器（1:2）

５類までを含む。

破片の下辺は鉢部口縁との接合部分で剥離している。この部分の径から復元される口縁部の直径は17cm前後である。時期は纒向４類頃と考えられる。

開口部は外側をわずかに肥厚させ、端部は面をもつが若干膨らむ。この端面はハケメ調整される。外面はハケメ後ナデで、下部ほどハケメをよく残す。線刻文様は調整後に施される。内面はナデ調整である。

文様は下部の複合鋸歯文と上部のバチ形図形に分かれる。それぞれの線は鋭利なヘラで描かれ、幅は0.8mm前後である。

複合鋸歯文は開口部から横走するが、４単位で途切れる。内部は交互に向きを変えて斜線が充填される。複合鋸歯文の右側には充填線の一つに接続した弧線１条が伸び、破片下辺沿いの右端にはわずかに１条の縦方向の線が確認できるが、欠損する右側にどのような表現が配されたかは不明である。

複合鋸歯文の上部には横長の空間を挟み、開口部に沿って縦向きのバチ形図形が配される。破片の上端には横方向の線がわずかに残っており、この線がバチ形図形の上辺となるか、もしくはバチ形図形に接する他の表現であると考えられる。バチ形図形内部は中心線とその両側に弧線１条ずつを配するが、右半分ではこれらに加え各線の間に短い線がみられる。

バチ形図形下辺の右端には３条の弧線による表現が接する。これは別のバチ形図形の裾部の可能性がある。

Ⅳ．おわりに

庄内式併行期の手焙形土器は櫛描文や線刻による装飾を施したものが多いが、バチ形図形を含む例は少数ながら大阪府から滋賀県・三重県にかけて分布する。また、大阪府久宝寺・加美遺跡では複数の例が出土している。[9)]

奈良盆地における組帯文系の土器文様は、弥生時代期後葉の唐古・鍵遺跡でまとまって認められる。[10)] 今回紹介した例により、当地域における同系統の土器文様のその後の展開について、その一端を提示できた。

註

1）杉山拓己2020「纒向遺跡出土の線刻文様をもつ土器片」『青陵』第160号

2）奈良県立橿原考古学研究所1993『龍王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第68冊

3）以下の記述における土器編年は下記の文献にしたがう。豊岡卓之1999「『纒向』土器資料の基礎的研究」『纒向』第５版補遺篇 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

4）前掲註２文献、p. 203

5）E-13号墳下層出土土器では東海西部系のS字状口縁台付甕の口縁部が４点、脚台部が３点図示されている（前掲註２文献、p. 124図206）

6）青木勘時2000「大和・柳本古墳群を支えたムラ」『古代「おおやまと」を探る』学生社

7）前掲註２文献、p. 53図79上段５

8）桜井市教育委員会の許可を得て実見し、実測図を作成した。財団法人桜井市文化財協会1996『桜井市内埋蔵文化財1995年度発掘調査報告書１』

9）櫻井久之2020「バチ形図形のある庄内期の土器―大阪市加美遺跡例の検討―」『難波宮と古代都城』同成社

10）田原本町教育委員会2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ―土器編１（絵画・記号・文様）―』

挿図出典

図１：『奈良県遺跡地図』改変　　図２：筆者作成